訶 陵 国 号 考

仲 田 浩 三

I-1 訶陵という国名は唐代の中国史料にのみ散見でき、1875年に Mayers⁽¹⁾ がジャワへの移民の最初であったコロマンデル海岸の Kalinga がその原音であると主張して以来 Groeneveldt⁽²⁾・Yule⁽³⁾・Chavannes⁽⁴⁾・Pelliot⁽⁵⁾・Hirth⁽⁶⁾・藤田博士⁽⁷⁾・Krom⁽⁸⁾・桑田博士⁽⁹⁾らがその原音を Kalinga / Kalinga と見做され、現在のジャワ島に比定されて来た。

I-2 現状では、東南アジア史の概説書として最も権威があるとされている Coedès の著書では、上代東南アジアへのインド人移民説に疑問を提出し⁽¹⁰⁾、Damais もこの推定的新説を実証すべく努力した⁽¹¹⁾。Coedès の見解を次に引用する。

「初めの3使節が640年・648年・666年であった Ho-ling について、或る最近の理論はそれをマライ半島に比定した。この理論は中国の諸史料のある地理的史料と一致している。しかし、他の点で我々が Ho-ling がジャワの中央に位置していたことに同意するならば、それは示されていない重大な諸々の困難を惹起する。さらに、Walaing 王国が位置していたのはジャワの中央であり、その Walaing の呼称は、Damais に據ると、恐らく中国名 Ho-ling の原音であろう。この時期の考古学的遺跡は不幸にして極めて乏しく、我々は、恐らく7世紀の中葉である Tuk Mas 刻文と、恐らく Dieng 台地の最古の諸々の建造物を除いては、殆んど何も列挙できない⁽¹²⁾。」

この文に示されている問題点の中で、訶陵の地理的位置、訶陵の原音、訶

陵の存続期間を主として取り上げることにはしたい。

II-1 本稿では Coedès が挙げた1964年の Damais とそこに挙げられていない1962年の岩本教授による両学説を紹介し、私見を述べて大方の御叱正をお願いしたい。

Damais は理論的に可能な方法で、旧唐書と宋高僧伝の次の2つの漢字表記について、

$$\begin{array}{l} \text{訶陵} \left\{ \begin{array}{l} *hali\eta, *hari\eta, *ali\eta, *ari\eta \\ *hale\eta, *hare\eta, *ale\eta, *are\eta \end{array} \right. \\ \text{波凌} \left\{ \begin{array}{l} *pali\eta, *pari\eta, *bali\eta, *bari\eta, *wali\eta, *wari\eta \\ *pale\eta, *pare\eta, *bale\eta, *bare\eta, *wale\eta, *ware\eta \end{array} \right. \end{array}$$

を音韻上作定し⁽¹³⁾、863年(784 Śaka)⁽¹⁴⁾に中部ジャワ南部の Prambanan⁽¹⁵⁾出土の D. 77⁽¹⁶⁾の前半の

Rake Walaiṅ Pu Kumbhayoni Śaṅ Ratu i Halu

と同刻文の後半の

wulakann i Walaiṅ

の記載、そして中部ジャワ北部の Kedoe 出土と考えられる⁽¹⁷⁾Wintan Mas A 刻文⁽¹⁸⁾が Pu Dakṣa の在位中(912—919/834—841 Śaka)に属し、その文中の Wandāmi Waleṅ の記載、中部ジャワ出土⁽¹⁹⁾の907年(829 Śaka)⁽²⁰⁾の D. 40⁽²¹⁾の Balituṅ 在位中の一石柱刻文の citralekha Walaiṅ の記載、そして、その他の中部ジャワの Prambanan から数 km 南の Ratu Bâkâ 台地から出土した Skt 語の856年もしくは857年(778 Śaka)⁽²²⁾の Walaiṅga-goptra と Prambanan の Dinas Purbakala 所蔵の Skt 語の一刻文⁽²³⁾の Walaiṅgajetra warabhaktihetoh の文中の Walaiṅga は、上記の古ジャワ語の Walaiṅ の Skt 語化した語形であり、現在の Ratu Bâkâ 台地の東80kmの Wânâgiri Kabupaten に同一語形の Waleṅ 村が属している⁽²⁴⁾。また訶陵の中国への入貢は旧唐書の640年(562 Śaka)から唐会要の818年(740 Śaka)の間である⁽²⁵⁾。そして Walaiṅ が大いに政治的役割を果たしたのは856

年 (778 Śaka)⁽²⁶⁾以後, 907 (829 Śaka)⁽²⁷⁾, 912年 (833 Śaka)⁽²⁸⁾, 912年~919年 (833~841 Śaka)⁽²⁹⁾の4刻文である⁽³⁰⁾。彼の結論は次の通りである。

1. 訶陵国は中国史料によると640年~818年, もしくは820年 (742 Śaka)の間存続し, 恐らく856年 (778 Śaka) ごろまで存続したと仮定したい⁽³¹⁾。
2. この国の原音は Walaiṅ/Waleṅ (OJ) (Skt. Walaiṅga) であって, De Casparis に據ると中部ジャワ南部の Ratu Bâkå に位置した或る時期のジャワ人王家の王宮 kaḍatuan の呼称であった⁽³²⁾。
3. 856年とは Pu Kumbhayoni の活動の開始の時期で, Kayuwapi の Rake であった Pu Lokapāla に次いで権力を獲得した年である⁽³³⁾。
4. Lokapāla と Kumbhayoni の時期には多数の liṅga の建立を示す石柱刻文が相次いで作られたと思われ, 恐らく Walaiṅ 家に対してジャワ人王家の相統上の勝利を示し, その逆ではないだろう⁽³⁴⁾。
5. 両家の関係は, 上記の (3) の Walaiṅ 家の系統の Sañjaya 家を Śailendra 家の血統に属した王らがその枠の中に合流したのであろう。しかし, Śaka 7世紀の古文書は極めて少なく, Śaka 8世紀(778—779年/700 Śaka)のそれに限定されていることを忘れてはならない⁽³⁵⁾。
6. ジャワ出土のこの時期の古マライ語の方言は, 全体として, Śri Wijaya の同時代の方言 (A言語) と異なる⁽³⁶⁾。

II-2 岩本教授の学説は, 先ず1962年に和文で, 次いで1968年に英文で発表された。本稿では前者の関係個所のみ引用したい。両者の間には著しい学説上の差異が関係個所に関する限り認められないからである。

1. 訶陵は旧唐書・新唐書・南海寄帰内法伝・通典・道里記・唐会要・冊府元龜などの唐代の史料に見え, 640年から818年の間に前後10回ほど唐に入唐したことが伝えられている⁽³⁷⁾。
2. 訶陵 Ho-ling は Kaliṅga の対音とされ, インドの Kaliṅga からの移住者の建てた国と推定されている (Coedès, 1948, p. 137; Majumdar, 1937, p. 112; Krom, 1931, p. 104.)⁽³⁷⁾。

3. 訶陵の「訶」は当時の音写(例えば「大唐西域記」など)を見ると、H音を写してK音を写すことはない。宋高僧伝は波凌(亦曰訶陵)と記されて、語頭音がK音でないことを明瞭に示している⁽³⁹⁾。
4. Mataram の Sañjaya 王統は Śiva 神の行者であり、訶陵国には仏教が行われていたのであるから、訶陵国と Mataram 王国とは異なることが知られる。従って新唐書の記事は Mataram の記事ではあるが、Java の記事として年来交渉のあった訶陵国の記事の中に混入したものと考えねばならない⁽⁴⁰⁾。
5. 1) 訶陵国には仏教が行われており、Śailendra 王家は仏教の信奉者であったこと。2) Java における Śailendra 王朝の消滅の時期は De Casparis の説(832)まで学者によって提唱されなかったが、Nālandā 碑文(co. 850)の記事から見て、9世紀前葉の中ごろと推定される。この年次は訶陵国の名がシナ史料から姿を消す820年と大体において一致することが指摘されるのであり、訶陵と Śailendra とを同一視することはあながち不可能ではない。しかし、両者を同一視するためには、1)「訶」が例えば「訶」のごとき字の誤伝であることか、2) 語頭音 Ś の音がH音に近かったということ、が証明されねばならぬ。この両者の中で、1)は訶陵が「宋高僧伝」に波凌と記されている点から成立しない。従って、2)の場合のみが考慮せらるべきであるが、筆者は、遺憾ながら現在のところその証拠を挙げることができない。問題はサンスクリット語の Ś 音を Java 人あるいは広くインドネシア人が如何に発音したか、それが如何に響いたかということになるが、筆者はサンスクリット語の硬口蓋音 S がH音に近く(例えば、ドイツ語の ch 音のごとく)発音されたことは有りうることを考えられる。この事実が証明されるならば、訶陵は Śailendra の対音であり、従って Śailendra 王朝の歴史は訶陵国がシナ史料に登場する640年より以前に遡ることになるのであり、従って Coedès の言う扶南の王家と Śailendra 王家の連続が結論されることになろう⁽⁴¹⁾。

III-1 訶陵の存続は中国史料に據ると次の如くである。

貞觀十四年(640)。遣使來朝。(舊唐書 卷197訶陵國)

唐。貞觀二十一年(647)。遣使獻金花等物。(太平寰宇記 卷177訶陵國)

貞觀二十二年(648)。朝貢使至。(唐會要 卷100訶陵國)

會寧律師。(中略)爰以麟德年中(664~665)。杖錫南海。汎海至訶陵洲。停住三載。(大唐西域求法高僧傳(42)卷上)

乾封⁽⁴³⁾元年(666)。(中略)訶陵國。各遣使獻方物。(冊府元龜 卷970)

義淨は天授2年(691)から延載元年(694)までの間に再度室利仏逝に滞在し、この間に咸亨2年(671)にそこに滞在して以後の見聞記を著して、天授2年(692)に大津師に「譯雜經論十卷」と共に「南海寄歸內傳四卷。西域求法高僧傳兩卷」⁽⁴⁴⁾、を附しており

明遠法師。(中略)遂乃振錫。南極屆於交趾。鼓舶鯨波。到訶陵國。(大唐西域求法高僧傳 卷上)

常敏禪師。(中略)附舶南征。往訶陵國。(大唐西域求法高僧傳 卷上)

道琳法師。(中略)鼓舶南溟。(中略)歷訶陵而裸國。(大唐西域求法高僧傳 卷下)

の記載は671年から692年までの見聞記と解される。運期師について

旋廻南海。十有餘年。善崑崙音。頗知梵語。後便歸俗。住室利佛逝國。于今人現在。(大唐西域求法高僧傳 卷上)

とある中の十有餘年とは671年~692年か、671年以前に逆るか判然としないが、ここでは前者と解し、7世紀70年代のことに属し、その間に上記の諸例から訶陵にも滞在したと思われる。そして

證聖元年(695)。九月五日。勅。蕃國使入朝。(中略)眞臘・訶陵等國使。給五箇月糧。(唐會要 卷100雜錄)

大曆三年(768)。十一月。遣使朝貢。(舊唐書 卷197雜錄)

〔大曆〕四年(769)。正月。(中略)訶陵・黑衣大食。(冊府元龜 卷972訶陵國)

〔大曆四年〕十二月。(中略)訶陵。並遣使朝貢。(冊府元龜 卷172)

大曆中訶陵使者。三至。(通典 卷332訶陵)

元和八年(813)。遣使獻僧祇奴・及五色鸚鵡・頻伽鳥。(下略)(通典 卷332訶陵)
〔元和十年(815)。〕八月訶陵國。遣使獻舍祇⁽⁴⁵⁾・及五色鸚鵡・頻伽鳥并
異香・名寶。(冊府元龜 卷972)

〔元和〕十三年(818)。十一月。獻僧祇⁽⁴⁶⁾女二人・及玳瑁・璫生犀等。(唐會要
卷100訶陵國)

大和年中(827～835)。再朝貢。(通典 卷332訶陵)

咸通年中(860～873)。遣使(通典 卷332訶陵)

の記載があり、特に注目したいのは阿陵が9世紀後半(860～873)まで存続し
ていたことである。

次に室利仏逝 Śrīvijaya 国の関係記事を見ると、

咸亨二年⁽⁴⁷⁾(671)。未隔兩旬。果之佛逝。經停六月。(中略)王贈支持。送
往末羅瑜國<sup>今改爲室
利佛逝也</sup>。復停兩月。轉向羯荼。(下略)(大唐西域求法高僧傳 卷上)
大津師。(中略)遂以永淳二年(682/683)。振錫南海。(中略)汎海。月餘達
尸利佛逝洲。(中略)遂以天授三年(691/692)。五月十五日。附舶而向長安
矣。(大唐西域求法高僧傳 卷下)

淨。(中略)遂以永昌元年(689)。七月二十日。達于廣府。(中略)廣府法俗
悉贈資糧。卽以其年十一月一日。附商舶。去番禺。望占波。而陵帆指佛逝。
以長驅。(下略)(大唐西域求法高僧傳 卷下)

延載元年(694)。(南海寄歸內法傳 卷1)

證聖元年(695)。九月五日。勅。(中略)尸利佛誓・眞臘(中略)等國使。給
五箇月糧。(唐會要 卷100雜錄)

長安元年(701)。十二月。佛誓國。遣使貢方物。(冊府元龜 卷970)

〔開元〕四年(716)。三月。佛誓國。遣使朝貢。(冊府元龜 卷971)

〔開元十二年(724)〕。七月(中略)尸利佛誓國王。遣使俱摩羅。(下略)(冊府
元龜 卷971)

〔開元十二年(716)〕八月庚子。制曰。尸利佛誓國。(下略)(冊府元龜 卷975)

〔開元十五年(727)〕十一月。佛誓國王。遣使。(下略)(冊府元龜 卷971)

開元二十九年(741)。十二月。佛逝國王。遣使來朝獻。(舊唐書 卷9本紀)

天祐元年(904)。六月。授福建道。佛齊國入朝進奉使都番長蒲訶栗寧遠將軍。(唐會要 卷100歸降官位)

を挙げることができ、文中の仏逝 *biuʔt-ʒiai* と仏誓 *biuʔt-ʒiai* は室利仏逝 *Śiet-liei-biuʔt-ʒiai*⁽⁴⁸⁾ / Śriviaya の省略形であると考えられ、唐会要の金利毗迦 *Kiem-liei-bjiei-ka*⁽⁴⁹⁾ も室利仏逝と同一視され⁽⁵⁰⁾、尸利 *Śiei-liei*⁽⁵¹⁾ も Śri の対音と考えられ、特に注目したいのは、訶陵が640年以後671年と692年の間以前に屢々中国に入貢し、また義浄 *pie-dziang*⁽⁵²⁾ の見聞記中に記載があるのに対して、室利仏逝が671年以後に義浄の見聞記と入貢記事の中に見出されることであり、このことは訶陵が室利仏逝より年代的に古く建国していたことを示すと考えられる。また室利仏逝が Śriviaya の音写であるとするならば、この国の最古の紀年を刻む682年の *Kēdukan Bukit*・684年の *Talang Tuwā*・686年の *Kota kapur* の3石柱刻文は同国の建国以後に属すると考えるべきである。

III—2 次に訶陵の地理的位置を考察したい。大唐西域求法高僧伝に
于時。咸亨二年(672)。(中略)淨。(中略)附書憑信廣州。(中略)達廣府。
唯有貞固・道宏。相隨。俱還廣府。(卷下)

至廣府。與波斯船主期會南行。(中略)漸向東天。(卷下)

また貞元14年(798)に上進されたと推定される賈耽の皇華四達記⁽⁵³⁾には
廣州東南海行二百里。至長門山。(中略)北岸則羅越國。南岸則佛逝國。
(下略)(新唐書 所収)

とあり、通典 卷332 の三仏齊の条には
便風二十日。至廣州。

とあり、旧唐書 卷188 の婆利の条には
婆利國。(中略)在廣州東南洲上。

とあり、当時広州が海港として重要であったことが知られる。

しかるに、広州で船に附して後、船は上記の義浄らの記載に據るとインドシナ半島・マライ半島の東方を南下したことを示し、それが当時の東西交渉

の主要幹線と考えられる。そして、皇華四遠記の記載には

又五日行至海峽。蕃人謂之質。南北百里。北岸則羅越國。南岸則佛逝國。

東水行四五日至訶陵國。南中洲之最大者。又西出峽三百里。至葛葛僧祇國。とあり、「質」*ṭiei*⁽⁵⁴⁾を従来マライ語の *səlat* の対音で、マラッカ海峡を指すとされている⁽⁵⁵⁾。古マライ語の例は未だ見出せないが、Majapahit 国時代と推定される刻文には官職の間を指して *səla* と呼んでいる⁽⁵⁶⁾。それ故に賈耽の「質」を現代マライ・ジャワ語の *səlat* の対音と断ずるには困難があると言ふべきであろう。しかし、それがマラッカ海峡を指していることは疑う余地は現在の所ないと言ってよく、訶陵がジャワ島もしくはその一部地域を指したと考えるためには、通典 卷332 の訶陵の条に

在南海中。東距離婆利。西墮婆登。南瀕海。

とあり、婆利 *B'ua-lji*⁽⁵⁷⁾は古ジャワ語で書かれ、820-829 Śaka の編纂といわれる⁽⁵⁸⁾ 古ジャワ語の *Rāmāyaṇa* の *Bali*⁽⁵⁹⁾、バリ出土の古バリ語で、839 Śaka の石柱刻文のそれ⁽⁶⁰⁾の対音と考えられ、墮婆登 *Dua-ba-taṅ*⁽⁶¹⁾ はスマトラに比定する推論もあり⁽⁶²⁾、大唐西域求法高僧伝 卷上に「訶陵洲」とある。従って訶陵は、Pelliot が指摘した⁽⁶³⁾ ように、ジャワに比定するのが適当と考えられる。通典の同条には

訶陵。亦曰社婆。曰闍婆。

とあり、社婆は *śja-b'ua*/*śja-ba*⁽⁶⁴⁾、闍婆 *śja-b'ua*⁽⁶⁵⁾で、古マライ語ではパンカ島出土の686年のKota Kapur 刻文の *bhūmi Jāva*⁽⁶⁶⁾の *Jāva*、中部ジャワ出土⁽⁶⁷⁾の856年のD. 28⁽⁶⁸⁾の古ジャワ語の部分の *bhūmi ri Jawa*⁽⁶⁹⁾の *Jawa* がそれぞれ今のジャワを指すことによっても理解できる。

大唐西域求法高僧伝によると

會寧律師。(中略)汎海至訶陵洲。停住三載。遂共訶陵國多聞僧若那跋陀羅。(下略)(卷上)

明遠法師。(中略)南極屆於交趾。鼓舶鯨波。到訶陵國。次至師子洲。(卷上)

常慙禪師。(中略)附舶南征。往訶陵國。從此附舶。往末羅訶國。復從此國欲詣中天。(卷上)

道琳法師。鼓舶南溟。越銅柱。屆卽迦。歷訶陵。而經祿國。(中略) 東印度。
乃遊南天竺國。(中略) 向西印度。(巻下)

とあり、当時、広州を発してマライ半島の東方を南下し、今のジャワ・バリに達し、あるいはそこから Malāyu・師子洲(今のセイロン)を経てインド(東天・中天・西印度)へ向う航路が存在したと考えられる。

III—3 通典 巻332 の訶陵の条には

訶陵。亦曰社婆。曰闍婆。

とあり、後の2つの呼称が今のジャワを指すとすれば、訶陵 $xā^1-liəŋ^1$ ⁽⁷⁰⁾ とそれらの中古音は全く異っている。新唐書 巻222下 にも通典のそれと同一文章を引いている。

1178年に周去非が著した嶺外代答 巻2 の闍婆國の条には

闍婆國、又名莆家龍。

とあり、莆家龍 $Piu^2-ka^1-liuŋ^1$ ⁽⁷¹⁾ は13世紀後半に成ったと考えられている⁽⁷²⁾ 島夷雜誌の大闍婆國の条には

大闍婆國。名重迦盧。離莆家龍。風帆八日乃至。⁽⁷³⁾

とあり、嶺外代答の莆家龍が、海港を指すと解される。後者の文中の重迦盧 $Diaŋ-ka-lu\Delta$ ⁽⁷⁴⁾ は、東部ジャワ出土の古ジャワ語の1269年の銅板刻文の $bhūmi Jangala$ の $Jangala$ ⁽⁷⁵⁾ の対音と考えられ、Rafflesの地図では Kediri (Banawan⁽⁷⁶⁾ ; 今の Brantas) 川の下流の南岸地区を $Jang-gala$ と記されている⁽⁷⁷⁾ ので、古ジャワ語の地名を残したものであろう。

III—4 1891年ごろ中部ジャワ南部の Magelang 地区で出土した824年(746 Śaka)⁽⁷⁹⁾ の D. 27, 34 に⁽⁸⁰⁾ は、Sut 語と古ジャワ語の部分から成り、後者の中に

tualas ri Hulu Luwaŋ si Silip rama ri Yada

(Hulu Luwaŋ の森林の長, Yada の父 si Silip)

とあり⁽⁸¹⁾、文中の si、下記の pu は共に敬称で、後者がより高い地位の人

名に使用される。ここで Luwaŋ は wanua (村) の名として記され、1894年ごろ中部ジャワ北部の Kedu 地区で出土した⁽⁸²⁾古ジャワ語の 887 年 (808 Śaka) の D. 93⁽⁸³⁾には

patih Walahigan pu Sdaŋ, Luwaŋ pu Amwari,
(Walahigan の patih, pu Sdaŋ, Luwaŋ の pu Amwari,)

とあり⁽⁸⁴⁾, Luwaŋ は Walahigan と共に watak(郡)の名として示され、中部ジャワ北部の Kedu 地区出土⁽⁸⁵⁾の古ジャワ語の890年 (812 Śaka) の E.46 には pati Luwaŋ pu Randhi (Luwaŋ の pati の pu Randhi)

とあり⁽⁸⁷⁾, 出土地が D. 93 と同じ distr. Balak, res. Kedu である⁽⁸⁸⁾ところから、同じ地方の同一郡名と考えられる。1926年ごろ中部ジャワ北部の Kedu 地区で出土した⁽⁸⁹⁾ 907 年 (829 Śaka) の銅板刻文 (OD. 8737) には

wanua i Sumṅka watak Kaluŋ Barak (Kaluŋ Barak 郡 Sumṅka の村)
とあり⁽⁹⁰⁾, Barak の k と t は書記上誤り易いので、t の誤り、そして Kaluŋ の u と ŋ の間に w が脱落したと考えられる⁽⁹¹⁾。この解釈が許されるならば、Kaluwaŋ Barat は「西 Kaluwaŋ」を意味し、上記の Luwaŋ (>Kaluwaŋ) と同一郡名で Kedu 地区に位置していたと考えられる。OD. 8737 は刻文中の王統表と共に別稿において原典批判を試みる予定である。

バリ出土の古ジャワ語の1071年 (993 Śaka)⁽⁹²⁾の 銅板刻文 OD. 5497 には ndan aḡlwaṅa ikaŋ karāman, Sakaraniṅ mā 4 mapakna paṅambaligya ri kaṅanak thāni, (さらに、その村は精々 4 mā をこの村人の葬式のために減らしてよい。)

とあり⁽⁹³⁾, lwa は「減少」を意味する⁽⁹⁴⁾。1365年に成った Nāgarakṛtā-gama には、例えば

atunaḥ ikaŋ knaṅ timuta maṅjaṅān lwaŋ ika bāp, 53-2-2 (「獣らは鹿と共に四散し、(その) 減少は多い。」)

とあり、lwaŋ の動詞形は alwaŋi⁽⁹⁵⁾などの例があり、

ri Lwaŋ, Wēntar, Maṅuri, Balitar mwaŋ Jimbe, 61-2-4

とも記され、Luwṅ, Wēntar, Maṅuri, Balitar, Jimbe が東部ジャワ南部の

地名であることはこの Canto から明らかで、Balitar は今の Blitar (<Bĕlitar) もしくはその近くに比定できるであろう。Lwaŋ はその他と共に比定が未だできない。1865~1866年ごろに東部ジャワで発見された E. 26⁽⁹⁶⁾は古ジャワ語で書かれ、1394年もしくは1395年 (1316 Śaka) の紀年を持ち⁽⁹⁷⁾,

sabhūmune si Darāni (中略) tan aloŋa, tan awuwuha, (「si Darāni の全土地は (中略) 減らしてならないし、増してもならない。」)

とあり⁽⁹⁸⁾, loŋ は lwaŋ>loŋ で音韻変化が示される。1581年ごろ編纂されたと考えられる⁽⁹⁹⁾現行本の Pararaton には loŋ で示され、同一語義を表わす⁽¹⁰⁰⁾。Van der Tuuk は *lwaŋ に「空間」、melōŋ duwa に「二つの錢を差引く。」、Pagadungan の東の村名として Long Sĕga を挙げている⁽¹⁰¹⁾。古ジャワ語の Rāmāyana には lwaŋ と kalwaŋ の例があり、Juynboll は前者に「減少」の、後者に「蝠」pteropus edulis⁽¹⁰²⁾の訳を与え、現代ジャワ語の kalōŋ に等価であるとした。Jansz は kalong に「蝠」(de vliegende hond, of vos?)」の訳を与え、long の accid. pass. で ngĕlong (dial.)=oleh 「漁師らの語」、他方で long/ĕlong に「減少」、ka-long に「減する」の訳を与え⁽¹⁰³⁾, これから Pakalongan という地名になるとした。Nāgaṛakrtagāma (57-6-4) に Pakalwaŋan という地名が記されており、その Canto の記載から Pigeaud の如く今の中部ジャワ北岸 Pĕkalongan に比定する⁽¹⁰⁴⁾よりも、東部ジャワの Siḡhasāri から Majapahit の間に位置していたと解すべきであろう。Raffles は今の Pĕkalongan を Pakalongan と表記している⁽¹⁰⁵⁾。

上記の諸史料もしくは資料から、次の語形と音韻の変化が認められよう。

luwaŋ>loŋ→kalōŋ→pakalōŋan
luwaŋ>lwaŋ→kaluwaŋ>kalwaŋ→pakalwaŋan→pakalōŋan

907年の郡名 Kaluŋ が Kaluwaŋ の誤記と考えることが許されるならば、それ以前の訶陵が中部ジャワに位置したと解され、訶陵は kaluwaŋ もしくは kalwaŋ/lkalōŋ の対音であったと考えたい。このことは室利仏逝が仏逝と省略して義浄自ら屢々記しているように、莆家龍の家龍 Kō-liuŋ の対音であったと解される。宋高僧伝の波陵 Puā¹-liāŋ¹⁽¹⁰⁶⁾ の例から訶陵時代にジャ

ワ人の間では Pakalwapan/Pakalogan と呼ばれていたことを暗示しているとも考えられる。

Ⅲ－5 紀年を欠き、中部ジャワ北岸の Pekalongan 地区の Sâjāmærtā 村で1963年出土の古マライ語の石柱刻文⁽¹⁰⁷⁾と中部ジャワ北部の Kedu 地区の Lebak 村出土の Skt 語の Tuk Mas 石刻文⁽¹⁰⁸⁾は Brāhmi 系 (one of the variety of Brāhmi) 文字⁽¹⁰⁹⁾の字形の中、新字形の cerebral ṆA/Ṇ-ṆA/-Ṇ と RA/R- の例から639年恐らく639年より少し古いと推定され⁽¹¹⁰⁾同時に前者と同一村名は1931年に2箇所あるが、現在の両地区の地理的・行政的範囲が筆者には判然としない。

すなわち、Sodjomerto (Rebang onderdistrict, Bawang district, Batang regentschap, Pekalongan afdeling; Kendal onderdistrict, & Proeko ondersitric, Weleri district, Kendal regentschap, Semalang afdeling)⁽¹¹¹⁾ の如くである。Tuk Mas 刻文の出土地は、現在の Semalang からさらに山中に入り、Bawen の西南の Ambarawa の近くに位置し⁽¹¹²⁾、Vogler の研究によると現在の Dieng (OJ, Di Hyang) 台地の石造建築物は南の Prambanam 方面のそれより年代的に古いとされ⁽¹¹³⁾、現在では Dieng 台地に入るには Pekalongan の東方約 53km の海岸に近い Weleri からの道路がある。故に本稿では Pekalongan の東約 7 km で、海岸から約 4 km の Batang⁽¹¹⁴⁾の近くの Sâjāmærtā 村を同刻文の出土地と考えたい。

Ⅲ－6 Sâjāmærtā 刻文を書体上 639 年以前にを比定することが許されるならば、その文中の

dapūn ta Selendra namaḥ [名はdapūnta Selendra 閣下。] (6－7行)
 Santanū namaṇḍa bāpaṇḍa [Santanū が彼の父の名であり] (7－8行)
 Bhadraviti namaṇḍa [Bhadraviti が彼の母の名であり] (8－9行)
 Sampūla namaṇḍa viniṇḍa Selendra [Sampūla が Selendra の妻の名であ

る。』(9—10行)

とあり⁽¹¹⁵⁾、732年の Sañjaya 王以前に中部ジャワ北岸もしくは Kēḍu (<Kḍu, OJ; Dieng/ḍi Hyan, OJ, 台地を含む) 山地に Selendra (<Sailendra) 家が政治的支配権を確立していたと解さるべきであろう。しかし、この支配者名が8世紀の中部ジャワ南部の Prambanan 地区の Śailendra 家と何如なる歴史的関係にあったかについては別稿に譲りたい。

さらに Kota Kapur · Sañjaya 両刻文の字形を Sājāmərtā · Tuk Mas · Hampran · Dināyā (Kēdukan Bukit · Talang Tuwā 両刻文を含む) のそれと比較すると、後者で特にジャワにおいて新字形の cerebral NA/Ṇ-/-NA/-Ṇ- · liquid RA/R- が Brāhmi 系文字から古ジャワ文字へ漸進的に変化・発展しているのに対して、前者では共に Brāhmi 系文字の中の liquid RA/R- · medial U (suku) が古風である⁽¹¹⁶⁾。故に、732年の Sañjaya 刻文は遅くともこの年に Sañjaya 王家が少なくとも中部ジャワ北部以外の地からその南の Prambanan 方面に移住したことを物語ると考えられる。

(連絡先)

- 註 1 Mayers, 1875, p. 184. Cf. Chavannes, 1894, p. 43; Crawford, 1820, II, p. 226, III, p. 197; Takakusu, 1896, p. XLVII.
2 Groeneveldt, 1880, p. 15.
3 Yule, 1886, p. 488.
4 Chavannes, 1894, p. 43.
5 Pelliot, 1904, pp. 293—294.
6 Hirth, 1911, p. 78, note 1.
7 Fujita, 1913, pp. 16—21.
8 Krom, 1926, Blz. 102—103.
9 Kuwata, 1936, pp. 53, 71; do, 1954, pp. 37—39; do, 1971, pp. 39—40, 42, 46.
10 Coedès, 1948, pp. 33—66.
11 例えば Damais, 1955b, pp. 365—382; Coedès, 1964, pp. 2—3.
12 Coedès, 1968, p. 79.
13 Damais, 1964, p. 120.
14 Damais, 1955a, p. 206. Cf. do, 1952, pp. 32—33; Stuart, 1875, p. XIV; Poerbatjaraka, 1926, Blz. 45.
15 Stuart, 1875a, p. XIV; Susadjat, 1958, p. 24.
16 Poerbatjaraka, 1926, pp. 45—46; Damais, 1964, p. 121.
17 Stuart, 1875a, p. XIII.
18 Leiden の Museum van Oudheden 所蔵の S. J. 52 (Stuart, 1875a, p. XIII.) の銅板

- 刻文。模写は Stuart, 1875b, Pl. XX.
- 19 Kedu 地区の Magelang (Susadjat, 1958, p. 14.).
 - 20 Stutterheim, 1927, p. 205.
 - 21 Susadjat, 1958, p. 14.
 - 22 Stutterheim, 1935, p. 443, note 3. Cf. Damais, 1952, pp. 30—31; do, 1955a, p. 242.
 - 23 Susadjat, 1958, p. 31. Cf. Damais, 1964, p. 124.
 - 24 Damais, 1964, pp. 124—125.
 - 25 *Ibid.*, pp. 131—132.
 - 26 上記の註23を参照。
 - 27 D. 40. 上記の註21を参照。
 - 28 Brandes, 1913, Blz. 37; Damais, 1955a, pp. 49—50.
 - 29 Damais, 1964, p. 132.
 - 30 *Ibid.*, p. 132.
 - 31 *Ibid.*, p. 140.
 - 32 *Ibid.*, pp. 140—141.
 - 33 *Ibid.*, p. 141.
 - 34 *Ibid.*, p. 141.
 - 35 *Ibid.*, p. 141.
 - 36 *Ibid.*, p. 141.
 - 37 Iwamoto, 1962, pp. 62—63.
 - 38 *Ibid.*, p. 63.
 - 39 *Ibid.*, p. 63.
 - 40 *Ibid.*, p. 63.
 - 41 *Ibid.*, Iwamoto, 1968, pp. 64—65.
 - 42 義浄は「西域求法高僧伝」としているが、一般の書名に従った。
 - 43 乾封が正しい (Kuwata, 1936, p. 31)。
 - 44 大唐西域求法高僧伝 卷下。
 - 45 金祇は舍祇の誤記 (Kuwata, 1936, p. 53)。
 - 46 僧祇は僧祇の誤記 (Kuwata, 1936, p. 53)。
 - 47 三年は二年の誤記 (Kuwata, 1936, p. 40)。
 - 48 Mineya, 1972, pp. 105, 106, 109, 126.
 - 49 *Ibid.*, pp. 106, 115, 126, 127.
 - 50 Kuwata, 1936, p. 31.
 - 51 Mineya, 1972, pp. 106, 110.
 - 52 *Ibid.*, pp. 116, 121.
 - 53 Enoki, 1936, pp. 802—803.
 - 54 Mineya, 1972, p. 125.
 - 55 例えば Pelliot, 1904, p. 294.
 - 56 Pigeaud, 1960a, pp. 82—83.
 - 57 Mineya, 1972, pp. 106, 109.
 - 58 Poerbatjaraka, 1926b, p. 271.
 - 59 Juynboll, 1902, p. 371.
- Cf. Nāgarakṛtāgama には tanah i Bāli (42—1—3) とある。
- 60 Goris, 1954b, pp. 219—220.
 - 61 Mineya, 1972, pp. 108, 109, 118.

- 62 Damais, 1957, p. 612.
- 63 Pelliot, 1904, p. 294.
- 64 前者は河野六郎教授の教示による。後者はMineya, 1972, pp. 109, 119.
- 65 河野教授の教示による。
- 66 Coedès, 1930, p. 48.
- 67 Cf. Damais, 1952, pp. 30—31.
- 68 Susadjat, 1958, p. 10.
- 69 筆者の手拓によった。
- 70 河野教授の教示による。
- 71 河野教授の教示による。
- 72 Wada, 1954, p. 32.
- 73 *Ibid.*, p. 58.
- 74 Mineya, 1972, pp. 118, 126, 127.
- 75 Brandes, 1913, Blz. 188, 192. Cf. Damais, 1955a, p. 79.
- 76 Nakada, 1969, p. 117.
- 77 Raffles, 1817, 第2巻の巻末の地図。
- 78 Brandes, 1913, Blz. 4; De Casparis, 1950, p. 24.
- 79 Damais, 1955a, p. 111.
- 80 Susadjat, 1958, p. 9.
- 81 筆者の手拓を中心に De Casparis の転写を補った (De Casparis, 1950, p. 41.)。luwas は Luwaṅ が正しい (cf. Damais, 1970, p. 720.)。
- 82 出土地は desa Boeloes, distr. Balak, res. Kedoe (Brandes, 1913, p. 21.)。
- 83 Susadjat, 1958, p. 28. 紀年については Damais, 1955a, p. 39.
- 84 筆者の手拓を中心に Brandes の転写を補った (Brandes, 1913, p. 21; Damais, 1970, p. 720.)。
- 85 出土地は現代の Balak, Magelang (Soesadjat, 1949, p. 24.)。
- 86 Damais, 1955a, p. 191.
- 87 Soesadjat, 1949, p. 24. 筆者の手拓と OD. 2153, 2154 に據って Damais の遺稿を補った (Damais, 1970, p. 715.)。
- 88 上記註85を参照。
- 89 Stutterheim, 1927, p. 172.
- 90 *Ibid.*, p. 207.
- 91 筆者の写真を中心に上記 Stutterheim の転写と比較検討した。
- 92 Damais, 1955a, p. 229; Goris, 1954b, p. 199.
- 93 Goris, 1954a, p. 91.
- 94 Goris, 1954b, p. 271.
- 95 Pigeaud, 1960a, p. 39.
- 96 Soesadjat, 1946, p. 14; Stuart, 1875a, p. VIII.
- 97 Damais, 1955a, p. 245.
- 98 筆者の手拓を中心に Stuart の模写 (Stuart, 1875b, Pl. IV.) と Pigeaud の転写 (Pigeaud, 1960a, p. 124.) を参照した。
- 99 Nakada, 1969, p. 47.
- 100 Brandes, 1897, p. 19.
- 101 Van der Tuuk, 1901, pp. 720, 810—811.
- 102 Juynboll, 1902, pp. 479, 113.

- 103 Jansz, 1913, p. 394.
- 104 Pigeaud, 1962, p. 154.
- 105 Raffles, 1817, 卷末の地図。
- 106 河野教授の教示による。
- 107 Boechari, 1966, pp. 242—243.
- 108 Kern, 1911, pp. 201—204.
- 109 Nakada, 1973.
- 110 *Ibid.*
- 111 Schoel, 1931, Blz. 349.
- 112 Krom, 1926, 卷末の地図。
- 113 Vogler, 1953, pp. 249—272.
- 114 Atlas, 1938, B. l. t. 21.
- 115 Boechari, 1966, hal. 242 の向いの写真 243.
- 116 仲田, 1973.

引用文献

Atlas 1938

Atlas van Tropisch Nederland. 1938, 's-Gravenhage.

Boechari 1966

Boechari : Preliminary Report on the Discovery of an Old-Malay Inscription at Sodjomerto. *Madjalah Ilmu-ilmu Sastra Indonesia*, III, 2 & 3, 1966, Djakarta.

Brandes 1897

Brandes, J. L. A. : Pararaton (Ken Arok) of het Boek der Koningen van Tumapël en van Majapahit. *Verhandelingen van het Koninklijk Bataviaasch Genootschap voor Kunsten en Wetenschappen*, XLIX, 1, 1897, Batavia/'s Hage.

1913

: Oud-Javaansche Oorkonden. *Verhandelingen van het Baaviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*, LX, 1913, Batavia/'s Hage.

Chavannes 1894

Chavannes, É : *Voyages des Pèlerins bouddhistes. Les Religieux, éminents qui allèrent chercher la loi dans les Pays d'Occident, mémoire composé à l'époque de la grande dynastie T'ang par I-tsing.* 1894, Raris.

Coedès 1930

Coedès, G. : Les inscriptions malaises de Çrīvijaya. *BEFEO*, XXX, 1930, Hanoi.

1948

: *Les États hindouisés d'Indochine et d'Indonésie.* 1948, Paris.

1964

: Some problems in the ancient history of the hinduized states of South-East Asia. *Journal of Southeast Asian History*, 5, 1964, Singapore.

1968

: *The Indianized States of Southeast Asia*. 1968, Honolulu.

Crawfurd 1820

Crawfurd, John, J.: *History of the Archipelago containing an account of the manners, arts, languages, religions, institutions, and commerce of his inhabitants*, II. 1820, Edinburgh.

Damais 1952

Damais, L. C.: Études d'épigraphie indonésienne, III. *BEFEO*, XLVI, 1952, Paris.

1955a

: Études d'épigraphie indonésienne, IV. *BEFEO*, XLVII, 1955, Paris.

1955b

: Les écritures d'origine indienne en Indonésie et dans le Sud-East Asiatique continental. *Bulletin de la Société des Études Indochinoises*. Nouvelle Série, XXX, 4, 1955, Paris.

1957

: Bibliographie. *BEFEO*, XLVIII, 1957, Paris.

1964

: Études Sino-Indonésiennes, III. *BEFEO*, LII, 1964, Paris.

1970

: *Répertoire onomastique de l'épigraphie Javanaise*. 1970, Paris.

Enoki 1936

榎一雄: 賈耽の地理書と道理記の稱とに就いて [On the names of Geographic Book and Dau-liēi-kiei by Ka-tam]. 歴史学研究, 6, 7, 1936, 東京。

Fujita 1913

藤田豊八 狼牙脩国考 [A Study of the country of Lan-ṅa-siān]. 東洋学報 3, 1-2, 1913, (東西交渉史の研究南海編所収), 1943, 東京。

Goris 1954a, 1954b

Goris, R.: *Prasasti Bali*. I-II, 1954, Bandung.

Groeneveldt 1880

Groeneveldt, W. P.: Notes on the Malay Archipelago and Malacca compiled from Chinese sources. *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschappen*, XXIX, 1880. By reprint of the *Historical Notes on Indonesia and Malay compiled from Chinese Sources*. 1960, Djakarta.

Hirth 1911

Hirth, F. and Rockhill, W. W.: *Chau Ju-kua: His Work on the Chinese and Arab Trade in the twelfth and thirteenth Centuries, entitled Chu-fan-chi*,

- translation from the Chinese and annotation.* 1911, St. Petersburg.
- Iwamoto 1962
- 岩本裕 : Śailendra 王朝と Matarām 王国の Java 支配について。De Casparis : Inscripties uit de Śailendra-tijd, Bandung, 1950. [On the rule of Java by Śailendra Dynasty and Kingdom of Matarām]. 西南アジア研究, 1962, 京都。
- 1966
- : On the Ho-ling Kingdom. *Proceedings of the First International Conference Seminar of Tamil Studies, Kuala Lumpur-Malaysia, April 1966*, I, 1968, Kuala-Lumpur.
- Jansz 1913
- Jansz, P. : *Practisch Javaansch-Nederlandsch Woordenboek met Latijnsche karakters.* 1913, Den Haag.
- Juynboll 1902
- Juynboll, H. H. : *Kawi-Balinesch-Nederlandsch Glossarium op het Oudjavaansche Rāmāyana.* 1902, 's-Gravenhage.
- Kern 1911
- Kern, H. : Het Sanskrit-inschrift van Tuk Mas (Dakawu, res. Kēdu; +500 A. D.) (Met een facsimile.). *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Ned.-Indië*, 65, 1911. By *Verspreide Geschriften*, VII, 1917, 's-Gravenhage.
- Krom 1926
- Krom, N. J. : *Hindoe-Javaansche Geschiedenis.* 1926, 's-Gravenhage.
- Kuwata 1936
- 桑田六郎 : 三佛齊考 [A New Study of Śrīvijaya—Ch'i-t'u 赤土, Shin-li-fu-shih 室利佛逝, San-fu-chai 三佛齊], 台北帝国大学文政学部史学科研究年報, 3, 1936, 東京。
- 1945
- : 三佛齊考 附補考 [A Study of Kingdom of San-fu-chai with supplement]. 南方人文研究所論叢, 1, 1945, 台北。
- 1954
- : 南洋上代史雜考 [Miscellaneous Studies on the Ancient History of Southern Sea], 大阪大学紀要, 3, 1954, 大阪。
- 1971
- : A Study of Ch'in-t'u 赤土, an Ancient Kingdom in South-East Asia. *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* (The Oriental Library), 29, 1971, Tokyo.
- Mayers 1875

Mayers, W. F. : Chinese Explorations of the Indian Ocean during the Fifteenth century. *The China Review : or Notes and queries on the Far East*, IV, 1875—1876, Hongkong.

Mineya 1972

三根谷徹 : 越南漢字音の研究 [Studies on the Sino-Vietnamese]. 東洋文庫論叢 53, 1972, 東京。

Nakada 1969a

仲田浩三 : 元のジャワ進討 [The military expedition of the Mongols against Java]. 東方学, 37, 1969, 東京。

1969b

: ジャワの羽衣説話について [On a Tale of Swan-maiden in Java]. 鹿児島大学史録, 2, 1969, 鹿児島。

1973

: 東南アジアの Brāhmī 系文字の cerebral NA——扶南国の滅亡と訶陵国 Śrīvijaya 国の勃興の史的状況についての予備的考察——[Cerebral NA in one of the variety of Brāhmī script in Southeast Asia. A Preliminary Study on the historical Situation of Fall of the Kingdom of Fu-nan and of Rise of the Kingdoms of Ho-ling and Śrīvijaya]. 東方学, 45, 1973, 東京。

Pelliot 1904

Pelliot, : Deux itinéraires de Chine en Inde à la fin du VIII^e siècle. *BEFEO*, IV, 1904.

Pigeaud 1960a, 1960b, 1962

Pigeaud, Th. : *Java in the Fourteenth Century. A study in cultural history the Nāgara-Kērtāgama by Rakawi Prapañca of Majapahit, 1365 A. D.* I, 1960 ; II, 1960 ; IV, 1962 ; The Hague.

Poerbatjaraka 1926a

Poerbatjaraka, Lesya : *Agastya in den Archipel*. 1926, Leiden.

1926b

: De dateering van het Oud-Jav. Rāmāyaṇa. *Het gedenkschrift uitgegeven ter gelegenheid van het 75-jaring bestaan op 4 juni 1926 van het Koninklijk Instituut voor de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië*. I, 1926, 's-Gravenhage.

Raffles 1817

Raffles, Th. S. : *The History of Java*. II, 1817, London.

Schoel 1931

Schoel, W. F. : *Alphabetischer van de administrative- (bestuurs-) en adatrechte-*

- lijke indeeling van Nederlandsch-Indie*. I, 1931, Batavia?
- Soesadjat 1949
- Soesadjat Mintowaloejo : *Lijst van Oorkonden op koperplaten*. 1949, Djakarta.
- Stuart 1875a 1875b
- Cohen Stuart, A. B. : *Kawi Oorkonden*. Inleiding en Transscriptie ; Facsimile. 1875, Leiden.
- Stutterheim 1927
- Stutterheim, W. F. : Een belangrijke oorkonden uit de Kedoe. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde*, LXVII, 1927, Batavia.
- 1935
- : Epigraphica. *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde*, LXXV, 1935, Batavia.
- Susadjat 1958
- Susadjat : *Daftar Batu Bertulis*. 1958, Djakarta.
- Takakusu 1896
- Takakusu, J. : *A Record of the Buddhist Religion as Practiced in India and the Malay Archipelago (A. D. 671-695)*. By I-tsing. Translated by J. Takakusu, B. A., Ph. D. with a letter from the Right Hon. Professor F. Max Müller. 1896, Oxford.
- Vogler 1953
- Vogler, E. B. : Ontwikkeling van de gewijde bouwkunst in het Hindoeïstische Mid-den-Java. *Bijdragen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde*, 109, 1953, 's-Gravenhage.
- Wada 1954
- 和田久徳 : 宋代南海史料としての島夷雜誌 [Tao i tsa chik : a new Chinese Source of the History of the Eastern Archipelago and the Coast of Indian Ocean during the Sung Dynasty (990-1279 A. D.)]. お茶の水女子大学人文科学紀要, 5, 1954, 東京。
- Yule 1886
- Henry Yule, R. E. : and Burnell, A. C. : *Hobson-Jobson, a glossary of colloquial Anglo-Indian words and phrases, and of Kindred terms, etymological, historical, geographical and discursive*. 1886. By New ed. William Crooke, 1969, London.

On the name of the Kingdom of Ho-ling 訶陵 in Java

Kōzō Nakada

Since the theory regarding this kingdom was put forward by Mayers in 1875, A. D., according to which Ho-ling is the transcription of Kalinga in South India and showing that the people coming from that region had settled in Java, many scholars have accepted it. In 1964 Damais, who had been trying to prove the new theory by Coedès (proposed in 1948) wrote an article, in which he said that the name of Ho-ling in Chinese is to be transcribed *Walaiŋ* in Old Javanese found in southern Central Java, and that this state existed as a kingdom from 640 A. D. to 818 A. D. In 1962 Iwamoto wrote an article, in which the name was transcribed as *Śailendra*.

This writer has drawn following conclusions regarding this problem, 1) that Ho-ling existed from before 640 A. D. to the second half of the ninth century (860-873 A. D.), according to the Hsin T'ang-shu, 2) that Ho-ling was established as a country in before 640 A. D. because it had sent the envoys to China in 647 A. D., 648 A. D., and 666 A. D. which were earlier than the years noted in the book by 義浄 (jie-dziang) on the country of Śrīvijaya, 3) that during 唐 (Tan) period the main harbor was 廣州 (*Kuap-tšiau*) for plying between China and India or Southeast Asia by ship and then the route was along East of Malay Peninsula and Java, according to some historical sources in Chinese, 4) that Ho-ling is given the names of 社婆 (*Śia²-b'uā¹*) and 闍婆 (*Śia¹-b'uā¹*) in the Hsin T'ang-shu and the country of 闍婆 is named 莆家龍 (*Pū²-ka-lū¹*), too, in the Ling-wai-tai-ta and *Pū-ka-lū* is written the name of a harbor by way of 重迦盧 (*Jaggala*) at East Java in the 島夷雜誌 (Tao-i-tsa-chik), so *Pū-*

ka-liuŋ is not a name of country but that of the harbor of Pakalongan in 1817 A. D. at the northern Central Java, 5) that the following word formation and sound changes are conceivable :

luway > *loŋ* → *kaloy* → *pakaloyan*
luway > *lway* → *kaluway* > *kalway* → *pakalwayan* > *pakaloyan* } > *pakaloyan*

and 訶陵 (*xâ¹-liəŋ¹*) can be interpreted as the abbreviation of *pakalwayan* and identified with *kalway*/*kaloy* in Old Javanese, 6) that *Sājāməṭā* and Tuk Mas inscriptions (undated) are found in northern Central Java ; the former is found at the village near Batang which is located at the east of Pekalongan in the present, and these inscriptions are written in one of the variety of Brāhmī script which is, however, different from usual script in appearing of new types of letters in cerebral *NA/N-* and liquid *RA/R-* as shown on the inscriptions of Kēdukan Bukit, Talang Tuwā in Sumatra and Hampran, Dināyā in Java, and 7) that on the inscriptions of Kota Kapur at Bangka and Sañjaya in Java, archaic forms for liquid *RA/R-* and medial *U* (*suku* in Javanese) had been used reguarly, and if it is correct to identify *Sājāməṭā* inscription at the time befor 639 A. D. (of Nakada, 1973), the family of *Selendra* inscribed on it had ruled the northern Kedu ; also that the amily of Sañjaya settled at the southern Kedu or Pram-banan, either from another part of Java or from another land, in 732 A. D. at the latest.